

病院に天使が描かれる日には

緩和ケア医・二級建築士
おだこうじ

病が治らず、つらさが癒されないとき、患者は祈る。
目の前の患者に何もしてあげられないとき、私はせめてそばに寄り添う。

そこで起こることがどんなに不条理であっても、それが不幸なことではないようにするために、私たちはお互いの手を離さないように一生懸命に力をこめる。

たぶんそんな時に、天使は描かれる。

今を変える希望であったり、今を忘れる諧謔であったり、あるいは今を受け入れる諦観であったり、天使はその都度、まったく違う顔をする。

どの天使も私たちの軋むような時間は止めないし、目を覚ましたくない明日を取り換えることもないだろう。けれども、ほんの少し、明日を迎える意味は変える。なぜなら私たちが棲む暗闇に共時性に天使が-自分のほかに天使を描くような人が-存在することを知り、私たちは一人ではなくなるのだから。

道端にタンポポが咲くように、畑に雲雀がさえずるように、病院に天使が描かれる。今回のプロジェクトでは、天使は私たちに光を降り注ぐのだろう。理屈抜きに、会場で楽しいひと時を与えてくれることに心から感謝する。加えて、天使の放つ光の糸が、ともすると孤立しがちな私たちを粘稠に結びつけてくれることを願ってやまない。

私たちに、いま必要とされているのは何でしょうか。

私は、それは「光の天使」だと思います。私たちの足許には、不安や対立という負の記号が満ちあふれています。そのため身と心は病(やまい)や痛みを負っています。その病と痛みを治癒してくれるのが、慈愛のパワーをもった「光の天使」の存在です。

ドイツの画家クレーに、こんな言葉があります。「音と色彩は、それ自体でひとつの神秘である」と。クレーは、晩年皮膚硬化症で苦しみました。そんな中、子供のような「光の天使」を描きました。そこには不思議なユーモアが溢れ、心をなごましてくれます。

では「光の天使」は、いったいどこにいますのでしょうか。私は、ほかでもない病院の中に、「光の天使」が住んでいると考えています。見えない天使が、日々病と痛みを癒しています。ですからアート作家は、この見えない「光の天使」の助けを借りながら、色と形に自分の祈りを託せばいいのです。「光の天使」の翼が全てを包み、良き道へ導いてくれます。そして作品を視た方も、自分の中に、もう1人の「光の天使」が住んでいることに気づくはず。アート作家は、その少しばかりの手助けをすればいいのです。多くの「光の天使」が立ち降りることを期待します。



「光の天使」と出会う

詩人・美術評論家
柴橋伴夫 (しばはしともお)

